

「モンゴルの大地に日本の風を」

—新モンゴル学園の誕生—

Japanese Wind to Mongolian Bigland:

Grand Opening of New Mongol Academy

新モンゴル学園・理事長 ジャンチブ・ガルバドラッハ

Janchiv Galbadrakh

(President, New Mongol Academy)

キーワード：新モンゴル工科大学、日本式高専導入

2014年9月15日。これは、モンゴルの大地に全く新しい風が力強く吹き始めた日である。というのは、「新モンゴル学園」がこの日に誕生したのだ。

思えば、私が数多くの山形県民と宮城県民を中心とした日本人有志の支援により2000年10月にモンゴル初の日本式高等学校である「新モンゴル高校」を設立したことが、新モンゴル学園の発端となっている。当高校において行われた日本式教育のあり方がモンゴルで話題になり、卒業生たちの実績および活躍により新モンゴル高はモンゴルのトップ私立学校の一つとして認められるに至っている。実績の一例として、全卒業生のうちおおむね3割に当たる約400名が海外の大学に留学しており、中でも270名以上の卒業生が日本の大学や高専に留学しているのである。

新モンゴル高校のこれまでの実績が高く評価され、一方で工学士や技術者の養成ニーズが社会において高まるにつれて、私は次なる夢を胸に秘め、日本での留学経験のある仲間とその夢を共有し始めた。それは、「新モンゴル高校」の延長として「新モンゴル工科大学」と「新モンゴル高等専門学校」を新しく設立することであった。その夢が去年9月に実現したことで、これらの学校を傘下におく「新モンゴル学園」（以下「本学園」という。）が創設されたのだ。

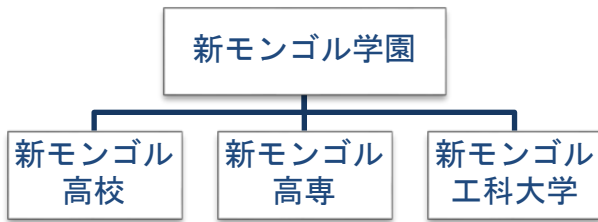


図1. 新モンゴル学園の組織図

図2. 新モンゴル工科大学および新モンゴル高専の開校式
(左から新モンゴル高校のナランバヤル校長、ガルバドラッハ理事長、工科大学のガンゾリグ学長、高専のブヤンジャルガル校長)

本学園の基本理念は、知識と能力と技術を兼ね備えた人材すなわち国家の将来を背負っていくリーダーの養成である。また、国内外の教育機関と協力する姿勢をより万全なものとするため、特に日本の皆様とのこれからの協力活動に大変期待している。

なお、本学園の特徴として、校長および学長組の全員が日本留学経験者であることである。例えば、理事長である私(51歳)は山形大学(教育学修士)と東北大学(博士課程満期退学)の出身、新モンゴル高校のナランバヤル校長(38歳)は京都大学(法学修士)の出身、高専のブヤンジャルガル校長(31歳)は佐世保高等専門学校(工学技士)と千葉大学(工学修士)の出身、工科大学のガンゾリグ学長(49歳)は東京工業大学(工学博士)の出身である。

続いて、本学園のうち、新しく開校した工科大学と高専について簡単に紹介することとする。

新モンゴル工科大学

「新モンゴル工科大学」は2013年にモンゴル国教育科学大臣により正式に認定され、1年後の2014年9月に開校している。ガンゾリグ学長は前述したとおり東京工業大学を卒業しているので、出身大学をモデルにしたいと強く望んでいる。

モンゴルでは、ハイテク産業の発展、科学技術インフラおよびイノベーション・プラットフォームの構築が不可欠であるにもかかわらず、その分野の人材不足が深刻な問題となっているのが現状である。そして、工科大学における人材育成がこのような産業技術分野の発展の鍵を握るという事実は、米国のマサチューセッツ工科大学および東京工業大学の業績と社会における貢献から明確である。本大学では、世界的に好評なアントレプレナー様式をモンゴル国内で初めて導入し、活力ある社会の実現および発展に貢献し、国内のみならず世界の舞台で羽ばたける、知性と創造性に富んだ真のエンジニアの育成を理念として活動している。さらに2050年まで世界大学ランキングのトップ100に並ぶことを目標としている。

学術および工学分野の8専攻から構成され、各専門教育課程はコース制となっており、初年度である2014年は学生46名、教員10名、客員教授5名、職員11名とスタートを切った。(図3)

学科	学部	修士
バイオ・ナノ工学	●	●
物質工学	●	●
機械工学	●	
電気電子工学	●	
建築工学	●	
情報通信工学	●	●
人工システム科学	●	
環境工学	●	

図3. 学科紹介

なお、本大学は、世界的に知名度の高い大学および研究機関とグローバル・ネットワークおよびパートナーシップを築くことを使命としている。開校式には、日本から久留米工業大学、横浜国立大学、東海大学、東京工業大学、東北大学、名古屋大学、秋田大学などから代表者が来賓しており、そのうち3つの大学と学術連携協定を結んでいる。

新モンゴル高等専門学校

モンゴルのGDP経済成長率が二桁に達しているとはいえ、社会全体の発展および整備は未だ不十分である。さらに、基幹産業開発のために4万人以上の技術者が必要とされているため、多数のモンゴル人技術者の育成が求められている。そこで、仙台高等専門学校のOBでもあるモンゴル国教育科学大臣L. ガントムル氏の発案により、日本の国立工業高等専門学校機構及び日本の国際協力機構(JICA)や在モンゴル日本国大使館の協力のもとで、日本の「高専教育システム」がモンゴルに導入され始めている。第一弾として3つの高等専門学校の設立を進めているが、その一つが本「新モンゴル高等専門」であるのだ。

昨年11月に日本の国立高等専門学校機構の小畑理事長がモンゴルを訪問し、モンゴルの教育科学省と協力協定の覚書に調印している。これによって、日本とモンゴルの高専が人的および学術的に交流することが可能となった。また、モンゴル国政府は円借款により合計1000名の技術者を5年間に渡り日本に派遣することを決めている。そのうちの200名は日本の高専教育を受ける予定である。このプログラムには、新モンゴル高専の学生も参加するであろう。



図4. 協力協定書覚書の調印式にて
(左：日本国立工業高等専門学校機構理事長小畑氏、右：モンゴル教育科学大臣L. ガントムル氏)

本高専は、日本とモンゴルの将来を担う技術者の育成を目指している。開校に当たって、電気電子工学科、機械工学科、物質工学科、土木建築工学科といった四つの専攻を設け、学年定員140名によりスタートしている。

「新モンゴル高専」S. ブヤンジャルガル校長は、開校に当たって次のように意気込んでいる。“技術大国日本の工業教育のブランドである『高専』を導入することによって資源大国モンゴルが経済的に大きく飛躍するだろう。実践的技能を身につけた創造的な技術者を育成することは国の真の繁栄につながるのだ。そのためには日本の高専教育システムが最適だと確信している。私は、日本の高専を卒業して、日本の製造分野で働いた経験のなかで、多数の高専卒業生が会社のトップになり、新規製品や技術開発の先駆者になっていったのを目の当たりにしてきた。きっと、本高専の卒業生たちも国を背負う技術者になるだろうし、そのために我々は日本の経験に習うべきである”。まさにその通りだと私は思う。

キャンパスライフ

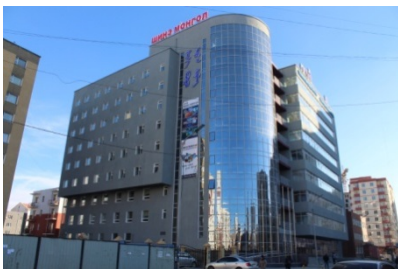


図5. メイン校舎



図6. 大学生らの物理実験の様子



図7. 高専の技術サークル

Contacts:

Manlaibaatar Damdinsuren street 43/1, Khoroolol-13, Khoroo-25, Bayanzurkh district, Ulaanbaatar, Mongolia

Tel: 976-75777799, e-mail: info@shinemongol.edu.mn, web address: www.shinemongol.edu.mn